胴が鳴るような深い低音、明るいハリのある中音、そして
透明でよく通る高い音…ギターは持つ人を、
いつしか吟遊詩人にしてしまう。たとえ、その日が、
いいようのないメランコリックな秋の一日であったとしても、
たとえ、いてつくような厳しい冬の朝であったとしても…
ギターの豊かな音が、人の心を、暖かく
ときほぐしてくれるだろう。そして、今日という日を
明日という永遠に未知の日を確心させるに違いない。